

一緒に意識高めていこうや

いつ起こるかわからない自然災害。テレビ・ニュースで被害状況を見て、「こわいな」と感じるだけでいいのだろうか。

「地震の恐ろしさはみんなわかっていて、けど、体験してないから意識が高まらないのも無理ないわ。そこをどう意識を持ってもらえるか、僕は訴えていくで」

土居自主防災連合会会長の松本勝弘さんは言います。災害は、他人事ではなく、自分自身のこととして置き換えなければなりません。

経験してないからこそ考えたい危機感。地域ができること、共にできることは何か、一人一人が意識を持つことが求められています。

「いずれ大きな地震がきたときは、自分が死んだとしても、生き残った人たちが一時避難所の日吉公園にきてもらって活動できる状況をつくるのが一番の思いやな」

土居自主防災連合会
会長 松本 勝弘さん

共



昨年の大阪880万人訓練(八雲小学校)

地元を守る組織として活動を

自主防災組織とは、地域住民が自主的に連携し、普段から防災活動を行い、万一に備えた住民組織です。守口市では、全校区に計104の自主防災組織があります。自主防災組織がうまく機能していれば、大規模災害が発生した場合、消防や警察などの公的機関だけでは、充分な対応ができない時に、住民が一致協力し、地域ぐるみで被災者の支援や助け合いに取り組むことができます。避難訓練・避難所開設訓練の実施や、地域のハザードマップ作りをはじめ、落ち着いた避難行動を取るために、避難ルートをその地域内で決めておくことが重要です。なぜなら、守口市は密集住宅街が多く、大地震が発生した場合、建物が倒壊し火災が起きるリスクが高いからです。

市民一人一人が、さまざまなことを想定し話し合いの場を持ち、防災に対する意識を高める活動への参加が大切ではないでしょうか。

地域との繋がりが大切や

「自分たちの地域は自分たちで守る」という理念のもと、消防組織法で定められた非常勤の特別職公務員で構成されているのが、消防団です。地域の自主防災リーダーとして日ごろから、仕事などのかたわら、さまざまな訓練を行っています。災害時には、避難所開設や皆さんの誘導、人命救助などを行います。

「常に携帯電話を持ち、寝るときは、頭の上に地図とメモを置いてる。責任があるからやるしかない。意識は常に持つとかなあかん」消防団副団長の山田幾久雄さんは言います。

「地域の人のためなのはもちろん、自分のためでもあるからな」

やる以上は徹底してやる、地域の中で無責任なことはでけへん、山田さんの使命感が全ての消防団員の活動力につながっています。

「一番大事なことは、地域と密接につながっていくこと。高齢化が進んでるけど、その人たちは地域とのつながりが強いというメリットもあるんや」

今後の課題は、若い人の入団が少ないこと、だと言います。そして地域の代表として、活動してくれる皆さんがいるからこそ、いざというときに対応ができます。皆さんも地域の防災活動にぜひ参加してください。参加して意味のないことは一つもありません。防災訓練、防災の知識を知り、そこで広がる地域の輪は、必ず被災につながります。一人一人が被災に向けてできることを考えるときは、います。



守口市消防団
副団長 山田 幾久雄さん

助

消防技術を錬磨

今年の9月、大阪府消防大会の小型ポンプ操法部門に守口市消防団が北河内地域代表として出場します。

団体規律の向上や消防体制の強化をはかると共に、市民の防災意識の向上や消防団活動に対する市民の理解が深まることから、消防団員の士気はより一層高揚し、各自の仕事・学業を終えた後、日々厳しい訓練を重ね、技術のレベルアップに励んでいます。

いざというとき、「自分たちの地域は自分たちで守る」という団員たちの強い決意が、災害に強いまちづくりに欠かせないと感じます。



大阪府消防大会に出場する守口市消防団員の選手